

超大国の威信：スミソニアン2

阿子島 香

[東北歴史博物館館長講座概要：歴史博物館グローバル紀行②]

2024 年 5 月 25 日

講座要旨

新シリーズでお話をします館長講座の2回目です。「歴史博物館グローバル紀行」と題し、世界各地の博物館を、皆さんと一緒に巡ります。考古学と歴史を中心にして、海外のミュージアムを訪ねて、各地の展示と郷土史を、世界史の視点から考えていきます。全8回の連続講座ですが、各回は独立した内容ですので、お楽しみください。今後の内容は、次のように予定しております。③さまざまなパリの顔とミュージアム、④遠洋航海者：太平洋の人々と文化史、⑤戦争の記憶をつなぐ展示と歴史観、⑥南フランスの遥かなる先史時代、⑦ネイティブ・アメリカンの世界1、⑧ネイティブ・アメリカンの世界2。おおむね、アメリカとフランスの博物館を主にしますが、適宜ほかの国々の博物館にも触れていきます。またお話の内容では、時々、旧シリーズすなわち「東北グローバル考古学」の全24回の内容と関連させつつ、参照していきたいと思います。旧シリーズは、引き続き東北歴史博物館のHPにて、講座概要を公開しております（多くは「読む館長講座」として、改めてエッセイとして再構成したものになっています）。あわせてご参照いただければ幸いに存じます。

今回は、先月に続いて、ワシントン D.C. にあるスミソニアンの博物館群から展示内容に関してご紹介します。首都の中心部にあるナショナル・モールの両側に主要博物館が立地し、都市計画の一部として、また世界最大の博物館群として有名です。21館の巨大な国立博物館、国立動物園から構成され、とても網羅的に取り上げることはできませんが、館長が訪ねた専門の部分、教育交流経験のある部分などを重点的にご紹介します。博物館群とともに、1846年に創立されたスミソニアン協会 (Smithsonian Institution) は権威ある研究所でもあり、アメリカの自然史や、美術史、歴史学、人類学研究の中核としての役割を果たしてきました。収蔵標本数は、1億4200万点とも言われます。また、国家予算、寄付、出版などで運営されていて、すべての博物館の入館料は、無料となっています。これらの研究所と博物館は、大統領府、議会議事堂、国防総省などに囲まれて、国家の中枢部に配置され、それぞれの分野の中核として機能してきました。まさに「超大国の威信」が表れている施設といえるでしょう。アメリカ・インディアン、アフリカ系アメリカ人、ラテン系アメリカ人などの歴史と美術を重視する組織再編成も、近年のアメリカ国内が直面する格差や分断の問題に対応した動きなのかもしれません。

アメリカ・インディアン博物館の展示では、インディアン諸部族の文化内部からみた視点も重視され、民族の尊厳を尊重する歴史観があります。アメリカ考古学では、インディアン諸文化の遺跡が研究対象となるわけですが、伝統的に考古学分野は自然の歴史、すなわち自然史の一部として扱われてきました。極北から砂漠までの極めて多様な環境のもと、アメリカ・インディアン諸族の独自の民族文化が、敬意を持って解説されている新博物館は、超大国みずからの歴史認識の変化を示しているようにも思われます。同博物館の導入展示の部分をご紹介します（2008 年時点）。石器の代表的な種類に、point（尖頭器、槍先、石鏃）があります。展示は、この point を全米から集成し、地域的、編年的に整理したうえで、壁面の展示板に図案的に並べ、下部の引き出しを選んで、多数の資料を実見できるようになっています。たとえば、大平原地域（the Great Plains）の最古の文化であるパレオインディアン期の尖頭器は、クローヴィス型、フォルサム型、アゲートベースン型などが収蔵展示で見学できます。北米考古学では、土器の編年学とともに、尖頭器・石鏃の型式学で地域編年が組み立てられてきた研究史が重要で、それが反映されています（館長の評価）。

人類学と考古学では、国立自然史博物館（NMNH）の人類起源のテーマ部分をご紹介します。全世界が対象であるという考え方にもとづく展示は、やはり超大国の中心博物館としての威信を示す部分とも見えます。地球の起源から地質時代、古生物学、古人類学、考古学までが一体として連続する考え方も特徴的です。自然と「ヒト」とを一連の歴史として捉えて、地域を越えて比較していく発想は、日本考古学とはずいぶん違います。スミソニアンでは、各博物館の各部分の常設展示を順次、計画的に再編成していきます。巨大博物館群が、リニューアルオープン部分をいつも継続して進めていると考えるとイメージが捉えやすいでしょうか。前回講座では「大海洋（Ocean Hall）」の新オープンをご紹介しましたが（2009）、同様のリニューアルが常に進行しています。人類の起源の展示部分は、2008 年に見学した時点で、相当にクラシックな展示でした。東アフリカのオールドワイ文化はじめ、猿人、原人、旧人、新人段階のそれぞれを全世界的に解説していましたが、全体的に 1970 年代位の考古学界の定説で展示してあり、随所に「新研究と新証拠で、当館展示のここは誤りと判明」との追加パネルがありました。「博物館学」的に考察すれば、日本の博物館展示では、行わないでしょう。科学は常に進歩を続けていくものという、自然史博物館の考え方が知られて興味深いことです。その後のリニューアルはまだ見学機会がなく残念です。

航空宇宙博物館の別館である、ウドヴァー・ヘイジーセンター（Udvar-Hazy Center）の航空機展示をご紹介します（2018 見学時）。ワシントン D.C. 郊外の飛行場に隣接し、巨大な格納庫風の展示施設に、実機がところ狭しと並んでいます。スペースシャトル Discovery 号、コンコルド、B29 エノラ・ゲイ号（広島に原爆を投下）、初期の複葉機から、第二次世界大戦時の戦闘機など多数、民間航空の発達ほか、航空宇宙開発の超大国アメリカの威信を、ここでも見せつけられる、しかし大迫力の博物館です。1960 年代のジェミニ宇宙船は、二人乗りで、アポロ計画の前段階に位置づけられました。米ソ冷戦時代で、宇宙開発競争の一部でもありました。

トピックス

以上は、全体の要旨です。以下に、スライドで解説した内容から一部を選んで、项目的に紹介します。

・前回も触れましたが、東北大学在職中に、スミソニアン自然史博物館 NMNH (National Museum of Natural History) の教育部と交流の機会があって、そこで得た知見を含めて、多くのスライドで解説しました。東北大学学術資源研究公開センターの東北大学総合学術博物館と、NMNH 教育部との交流の中で、NMNH の知念淳子氏を通じての機会でした。同氏に深く感謝いたします。具体的には、阿子島が代表者を務めた大学院 GP プログラム (2008～2011)「歴史資源アーカイブ国際高度学芸員養成計画」による考古学分野大学院生のワシントン D.C.研修、2009 年 10 月の東北史学会仙台大会での、大学院 GP プログラムとの合同国際シンポジウム「文書館・博物館のこれからとアーキビスト・キュレーター養成」に NMNH から知念氏、キンバレー・M. モーラー氏に参加いただいたこと、などがありました。この当時、公文書管理法が施行されて、海外諸国に比較して遅れていたと言わざるを得ない、日本の文書館整備と、専門的人材であるアーキビスト養成が、喫緊の課題となっていました。また学芸員養成課程のカリキュラムが改定されて、博物館実習の重視、学芸員資格関係の授業科目の大幅増加への対応に、各大学が直面していた時期でした。世界最大の博物館、スミソニアンとのプログラムの実現には、改めて関係者に深謝です。

・ナショナル・モールの様子とスミソニアンの巨大博物館群の配置、博物館の名称と内容の確認。スミソニアン協会（機構）の本部、通称「お城」(castle) の 19 世紀の歴史的建造物と、ジェイムズ・スミソンについて補足。この周辺は、超大国アメリカの威信があらわれる象徴的な都市空間であること。またアメリカの歴史を揺るがす数多くの出来事があった場所。たとえば、公民権運動が燃え盛っていたころ、その指導者マーチン・ルーサー・キング牧師が、リンカーン大統領記念堂から、有名な演説「私には夢がある」(I have a dream)を行なった (1963 年 8 月、25 万人ワシントン大行進)。現在も多くのデモ行進が行われる。超大国の威信と、人々の意思表示が同居する、両義的な「象徴的二面性」を有する場所といえる。

・今年度講座の全体は、「博物館学」という研究分野から考える世界史散策。博物館の歴史と展示に関心を持ち数十年の間、収集した資料から解説。スミソニアン協会は、数百万人にのぼる年間見学者に、無料の冊子『スミソニアンへ行こう』(goSmithsonian)を配布していた。自然史博物館の年間見学者数は、700 万人という。紙媒体時代の 2008 年版の冊子を紹介。表紙には FREE! (無料) の文字。A5 判で、64 ページあり、それぞれの博物館の見どころを解説している。この年の表紙は、「アメリカ歴史博物館」(National Museum of American History) の主要な展示物であった巨大星条旗。星条旗の星の数は 15 個で、米英戦争中 (1812～1815) に、要塞に掲げられていた実物。アメリカ国歌 (Star Spangled Banner) の作詞者フランシス・スコット・キーにイメージを与えたとされる。なお星条旗は 20 数回改正されていて、現在は星の数は 50 で、50 州を表わす。

・その冊子では、自然史博物館の解説で、チャールズ・ダーウィン（1809～1882）の生誕200 年記念展示として、「ラン（蘭）」(Orchid) が常設展示にあることを紹介。進化論の理論に影響した研究を解説。日本の博物館や美術館の短期的な特別展と違って、時に数年以上に及ぶ特別展示を、常設展示の一部として次々に更新していくという、大規模で多くの人員を有するスミソニアンならではの長期的展示計画が分かる。しかし、私たちの現実にとっては、そのようなコンセプトから学ぶということになるだろう。

・古生物学の展示場から、西部ワイオミング州中部の中生代の事例。7000 万年前の白亜紀に、火山活動により一気に埋もれた化石層（化石床）は、シダ類の繁茂する湿地帯で、泥の中にパックされた恐竜の時代の地層。たくさんの化石が発見された状況の展示のようす。研究部の成果から、多くのローカルな実物化石の展示が印象的。スミソニアンの博物館は、国家の中核的な研究機関でもあることを、改めて実感する。

・氷河時代終末の北米大陸の自然と人類生態学の展示。更新世末の絶滅動物の骨格展示や化石。マンモスゾウ、オオナマケモノ、オオツノシカ、絶滅種のヤギウ、サーベルタイガー（剣歯虎）など、多くの種が絶滅した。地球温暖化で氷河（氷床）の間が開いて、シベリアから人類が渡来してきた。人類の活動と動物絶滅の関係には、両説があること。この展示も、スミソニアンの博物館が国家的研究機関でもあることを認識させる。

・人類史の展示場から、フランス南西部ドルドーニュ地方の洞窟遺跡の発掘のようす。ジオラマは、フランソワ・ボルド氏の調査遺跡をモデルとする。氏は、1950～60 年代のフランス旧石器研究の権威者。遺跡名に「コンブ・グルナル」とある。ネアンデルタール人の時代の代表的な洞窟遺跡。ムスチエ文化という石器文化。中期旧石器時代のムスチエ文化の石器の型式変化について、ボルド氏に対してアメリカのビンフォード氏の大きな論争（館長補足説明）が学史上有名で、その舞台になった遺跡。スミソニアンの博物館で、アメリカ国立という位置づけでありながら、展示内容に世界全体の人類史、歴史、自然史を対象とするのは、ごく自然な考え方。このあたりにも、超大国としての矜持が滲み出る。

・人類史の展示場から、続いて後期旧石器時代の部分。クロマニヨン人の時代。世界最古級の土偶芸術としての、チェコ共和国モラビア地方、ドルニ・ヴェストニツェ遺跡の遺構ジオラマ。第2住居遺構、土偶焼成遺構、彫刻（線刻）作品など。約2万5千年前の、グラヴェット文化という時期。またラスコー洞窟の壁画制作のジオラマ。出土した石製ランプ。骨角器の芸術的装飾、ヴィーナス像など。しかし、このコーナーのような展示は、必然的に、すべてがレプリカにならざるをえない。それでも全人類の歴史を取り扱うという考え方。非常に現代米国的か（館長の評価）。

・同様に、アルプス山中で凍結状態のまま発見された「アイスマン」の復元展示も、オールレプリカ。イタリアとオーストリアの国境付近で発見された、約5300年前の、青銅器時代人。さまざまな携行品を身に着けて、山へ入った。矢が刺さり、頭部打撲、失血死。自然史博物館の一部でありながら、歴史学を含めての再現展示。

・一方で、新石器時代の部分には、実物資料を含む体系的な展示がある。よく見ると、1970

年代までに、アメリカの調査隊が現地に遠征して、発掘調査の結果取得した出土品（実物）と、世界史全体の概説（レプリカ）から、展示を構成している。かつて、アメリカの調査隊は、世界各地に派遣され、先端的な学術調査を行なった。その後、出土品の海外持ち出しが困難となって、現在に至っているが、このあたりに、戦後の超大国による学術資料のあり方が問い直される場面がありそうだ。（展示場のようすは、多くのスライドにより解説。なお上記人類史部分は、リニューアルされたことを付言）。

・航空宇宙博物館は、本館と別館から構成される。本館は、ナショナル・モールの南側、アメリカ・インディアン博物館の西隣、自然史博物館の斜め向かいにあって（配置図）、スミソニアンの中でも一番人気を誇る。年間入館者数は、680 万人に達する（2013 CNN）。入場無料の館内には、人類の月着陸を始め、多くの航空宇宙史の記念的な実物、実機が並ぶ。1903 年のライト兄弟による最初の飛行機ライト・フライヤー号、リンドバーグによる最初の大西洋横断単独飛行のスピリット・オブ・セントルイス号、アポロ 11 号の司令船カプセル、月の石など、圧巻の展示。

・別館はウドヴァー・ヘイジーセンターといい、ダレス国際空港に隣接した郊外にあって、巨大な展示場が格納庫のようになっており、百機を超える実物が、これも圧巻の展示。この別棟（マグダネル・宇宙格納庫）にスペースシャトルの実機とジェミニ宇宙船もある。ジェミニ計画は、米国宇宙開発史上に重要で、アポロ計画に先立って、多くの実証実験や準備を整えたと評価される。同じ展示場に、核弾頭を搭載する ICBM ロケットの模型などもあって、日本人にはやや違和感があるかもしれません。航空宇宙の歴史という観点で、軍事と民生を区別しない考え方が、随所に見て取れます。実機とともに、エンジンなど、さまざまな部品や技術的な要素の展示も充実。

・本館でも、別館でも、軍用航空機と民間機は、並んで仲良く展示されている。戦争は技術を発達させたという歴史を考えてしまう。第一次世界大戦の新兵器であった戦闘機と、郵便飛行機や初期の民間旅客機が、同じ航空技術の発展という目線上にある展示。また戦争の両当事国の航空機が同じように並び、比較される展示。日本本土の空襲に、サイパン島・テニアン島基地から大挙して飛来した「B29 戦略爆撃機」と、B29 を迎撃する本土航空隊であった「紫電改」が並ぶ。なお展示されている実機の B29 は、広島に原爆を投下した「エノラ・ゲイ号」である。（航空機の歴史は、多数のスライドで紹介）。

（本稿は、館長講座での配布要旨に補足したものです。）